



# 服部擔風の漢詩 孝忠園：専念寺 七言絶句 「七十述懐」



嘯月吟花鬢作絲  
謳歌昭代復奚疑  
向人説與温教旨  
子孝臣忠是我師  
擔風轍

月に嘯き花に吟じて 鬢絲となる  
昭代を謳歌して 復た奚ぞ疑わん  
人に向かって 説與す 温教の旨  
子孝臣忠は是れ我が師

つきにうそぶき はなにぎんじて びん  
しとなる  
しょうだいをおうかして またなんぞ  
うたがわん  
ひとにむかって せつよす おんきょう  
のむね  
こはこう しんはちゅうは これわがし

※ 嘯き  
※ 鬢絲  
※ 昭代

詩歌を口ずさむ  
鬢に白いものが混じる  
昭和の時代

※温教 溫柔敦厚  
※説興 説く

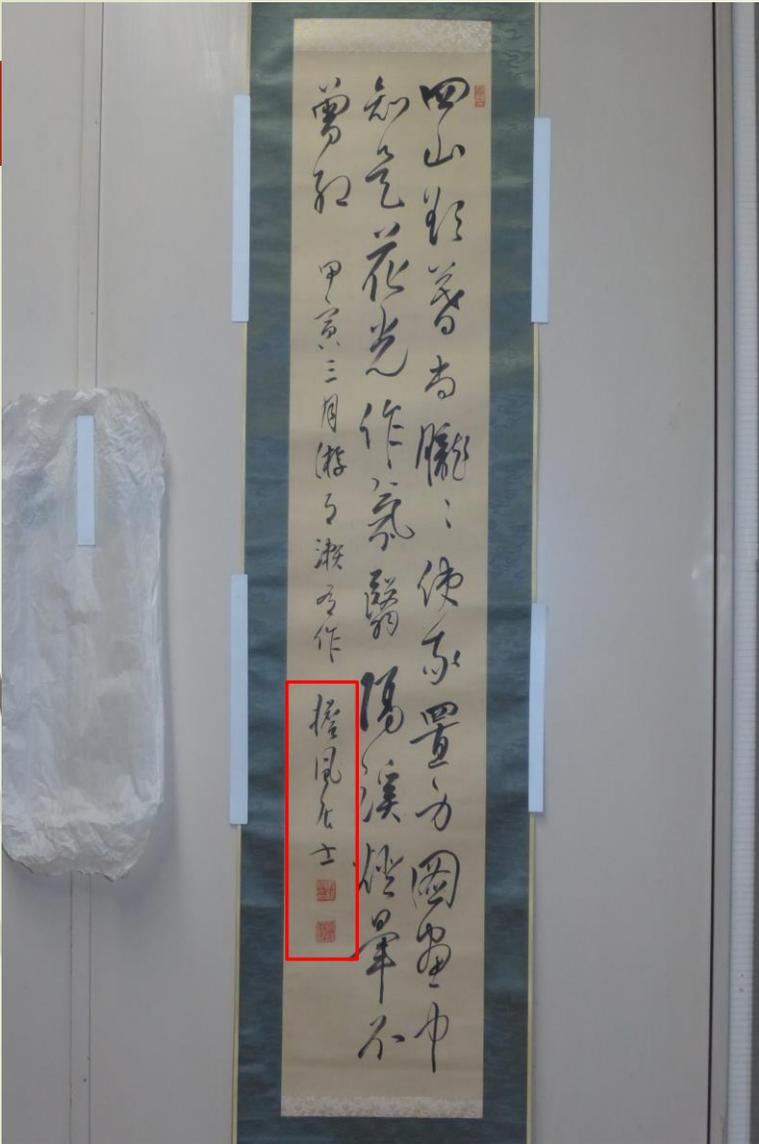
# 服部擔風の漢詩 『月瀬観梅』

## 月ヶ瀬観梅 月ヶ瀬で梅を観る

四山欲暮尚朧朧  
 使我置身圖畫中  
 知是花光作氛翳  
 隔溪燈暈不會紅  
 甲寅三月遊月瀬有作  
 擔風居士

四山暮れんと欲して なお朧朧(ろうろう)  
 我をして身を図画の中に置かしむ  
 知る是れ 花光の氛翳(ふんえい)を作すを  
 溪を隔つる 灯暈(とううん)  
 會(かつ)て紅ならず  
 甲寅三月 月瀬に遊び 作有り 擔風居士  
 しざん くれんとほっして なおろうろう  
 われをして みをとがのなかに おかしむ  
 する これ かこうの ふんえいをなすを  
 けいを へだつる とううん かつて べにならず  
 きのえとら さんがつ つきがせにあそび さくあり  
 たんぷうこじ

朧朧 おぼろにかすむさま 灯 暈 ぼんやりした様子



## 服部擔風の漢詩 『紙本』

也是柳殘荷敗時  
夜窓の涼味一燈知  
人もし轍が近何の状を問わば  
但だ詩書を読み詩を作らずと  
擔風學人  
またこれりゆうざんかはいのとき  
やそうのりょうみ いったうしる  
ひともし てつがきんかの じょうをとわば  
ただ ししよをよみて しをつくらずと

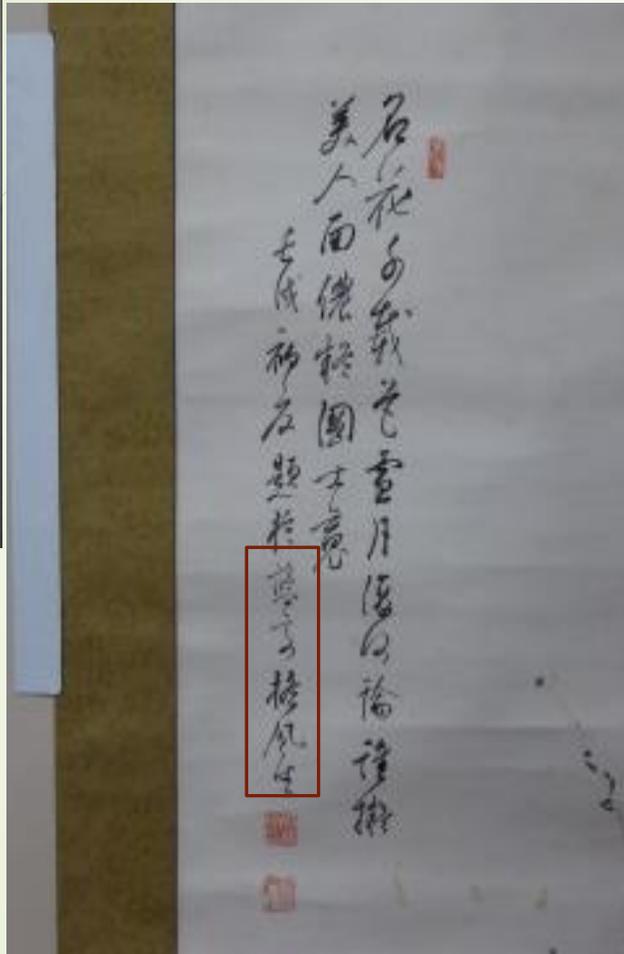
擔風學人

也是柳殘荷敗時  
夜窓の涼味一燈知  
人如問轍近何状  
但讀詩書不作詩  
擔風學人

また是れ柳殘荷敗の時  
夜窓の涼味一灯知る  
人もし轍が近何の状を問わば  
但だ詩書を読み詩を作らずと  
擔風學人  
またこれりゆうざんかはいのとき  
やそうのりょうみ いったうしる  
ひともし てつがきんかの じょうをとわば  
ただ ししよをよみて しをつくらずと

- ※ 紙本 しほん 紙に書かれた漢詩 絹本に対して
- ※ 柳殘荷敗 柳や蓮の葉も枯れる晩夏から初冬の季節
- ※ 轍 「擔風」の名前
- ※ 近何の状 近況

# 毛利梅友筆『名花十友之図』 擔風賛 五言絶句 紙本着色



名花千載色  
雪月復何論  
誰擬美人面  
儂疑國士魂  
壬戌初夏題於藍亭擔風生

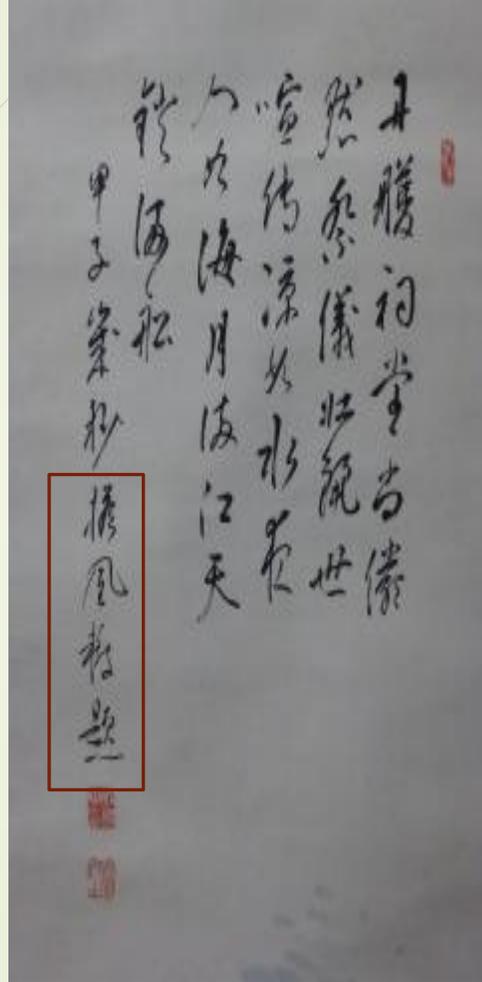
名花千載の色  
雪月復た何ぞ論ぜん  
誰か擬す美人の面  
儂は疑う國士の魂かと  
壬戌初夏題  
於藍亭擔風生  
めいか せんざいのいろ  
せきげつ またなんぞ ろんぜん  
だれか ぎす びじんのめん  
のうは うたがう  
こくしのたましいかと  
じんじゅつしょかだい  
らんていにて ろふうせい

※ 千載 長い年月  
※ 擬す なぞらえる  
※ 國士 すぐれた人物

※ 雪月 四季の美しい眺め  
※ 儂 わたし  
※ 壬戌 じんじゅつ

# 小野寺梅丘筆 『津島祭図』 擔風賛 七言絶句 紙本着色

賛・・・画賛 鑑識者によって書き加えられた書作品  
文芸作品 東洋画



丹朮の祠堂 丹塗りの津島社  
祭儀壮麗にして 世に喧伝す  
涼如水夜人如海  
月満江天燈満船  
甲子歳抄擔風輓題

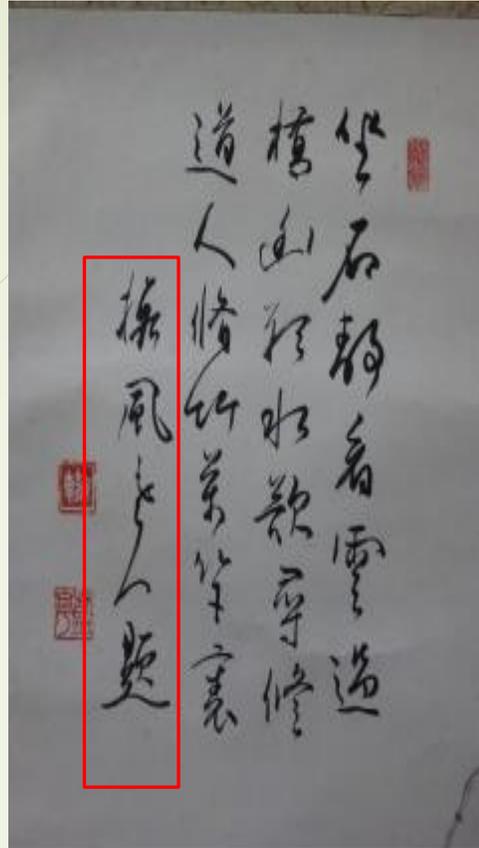
丹朮の祠堂 なお儼然  
祭儀壮麗にして 世に喧伝す  
涼 水の如き 夜は人海の如し  
月は江天に満ち 灯は船に満つ  
甲子歳抄擔風輓題  
たんかくのしどう なおげんぜん  
さいぎ そうれいにして よにけんでんす  
りょう みずのごとき よるはじんかいのごとし  
つきはこうてんにみち あかりはふねにみつ  
きのえね さいびょう ろふうてつだい

※ 丹朮の祠堂 丹塗りの津島社 ※ 儼然 おごそか  
※ 歳抄 年の暮れ

# 真野香邨筆『山水図』

## 擔風賛 五言絶句 紙本淡彩

賛・・・画賛 鑑識者によって書き加えられた書作品  
文芸作品 東洋画



坐石静看雲  
過橋幽聽水  
欲尋修道人  
修竹萬竿裏  
擔風老人題

石に座して 静かに雲を見る  
橋を過ぎて 幽かに水を聴く  
尋ねんと欲す 修道の人  
修竹万竿の裏  
擔風老人題  
いしにざして しずかにくもをみる  
はしをよぎって かすかにみずをきく  
たずねんとほつす しゅうどうのひと  
しゅうちく ばんかんのうち

※ 真野香邨 (まの こうそん)  
愛西市出身の日本画家。本名、比佐太郎。村田香谷に画を、小林卓斎に漢詩を学ぶ。漢詩文を地元の教育者に講義した。1866-1948。

※ 修竹 長く伸びた竹

# 服部擔風 蘇江（水辺）の漢詩 ①

老柳残荷又夕陽  
水邨繞屋稻花香  
客来皆道秋光好  
訂識衰翁怯峭涼

老柳残荷また夕陽

水邨（すいそん） 屋を繞（めぐって）

稻花香（かんば） し

客来つて皆いう秋光好しと

なんぞ識（し） らんや衰翁が峭涼

（しよりよう） を怯（おそるる）を

柳や蓮の葉が枯れる秋の夕陽

屋敷をめぐる水郷に稻の香りがする。

客はみな秋の風景は好ましいというが、

衰えていく私が

秋の物寂しさにおびえているのを知って

いるだろうか

近如錦綺遠雲霞  
照映長江橋路斜  
誰識我鄉新樂事  
清明春市祭桜花

近くは錦綺のごとく、遠きは雲霞

長江に照り映えて橋路は斜めなり

誰か我が郷の新たなる樂事を識らんや

清明の春の市に桜花を祭る

近くは錦のあやのように見え、遠くは雲か霞のように見える。

一帯の桜は木曾川の水に姿を写し照り映えている。

尾張大橋に通じる道が桜の中を斜めに走っている。故郷の新しい楽しみとなった清明のころに行われる桜祭りに春の市が立っている。

# 服部擔風 蘇江（水辺）の漢詩 ②

吟侶尋春赤渚頭  
桃青碑古水悠悠  
他年阮屐能餘幾  
每喫白魚思俊遊

吟侶と春を尋ぬ 赤渚の頭（ほとり）  
桃青の碑古く 水悠悠々  
他年阮屐（げんげき）能く余り幾ばくぞ  
白魚を喫する毎に俊遊を思う

漢詩の仲間と春を尋ねて  
揖斐川河口の水辺にやってきた。  
芭蕉の白魚の句碑は古く、水は悠々と  
流れている。

長い年月が経つても、消えることのない芭  
蕉のすぐれた功績に、  
白魚を食べるたびに思いを馳せるのである。

楼臺涵影水拖藍  
絃策寂寥春漸酣  
物候不関征战事  
鶯花依舊大江南  
楼台影を涵（ひたして）  
水藍（あい）をひく  
絃策（げんさく）く寂寥（せきりょう）  
春漸（ようやく）酣（たけなわなり）  
物候は関せず征战の事  
鶯花旧に依る大江の南

藍色の水面に楼台が影を映している。  
琴や三味線の音もなく  
寂しいが春は真つ盛りである。  
季節は戦時にはまったく関係なく、  
鶯が鳴き、花が咲く  
昔のままの木曾三川の南の風景である。

# 服部擔風の書と『焼き物』



楽茶碗「栄寿 八十三  
老人擔風」才兵衛



楽茶碗「寿 九十七  
擔風」伊藤才兵衛



楽焼菓子器「黄眉  
九十一 擔風居士」  
伊藤才兵衛



赤楽花入「泉 九十一  
老人 擔風」  
伊藤才兵衛



刻三島茶碗（多氣壁  
山作）「天真 擔風  
老人 九十四」



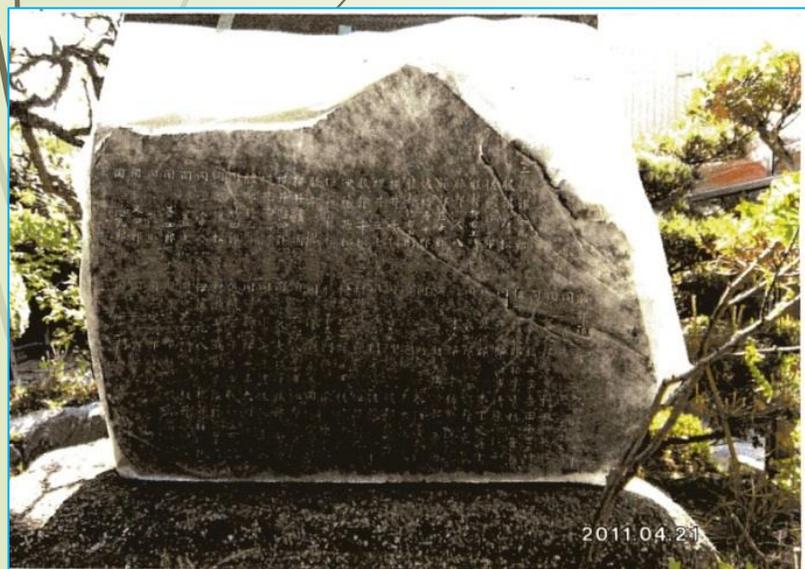
刻三島茶碗（多氣壁  
山作）「歌 九十八  
叟 轍」

多氣壁山（たき ばくざん）

四日市万古焼の陶芸家。詩書の篆刻に釉薬を入れた象嵌（ぞうがん）の「篆刻三島」の創始で知られている。晩年の擔風の書の茶碗や火鉢などを手掛けた。

# 服部轍碑文

## 寺子屋師匠『服部鐵四郎筆子塚』



嘉永之初開塾授徒讀書習  
 字執贄而及門者前後二百  
 有餘人而內則撫子第外攝  
 理鄉村公事拮据有功藩公  
 特許冠姓帶刀以酬勞・

癸起人  
 服部彌兵衛  
 服部定八  
 服部長右工門  
 服部佐左工門  
 服部久三郎  
 服部治朗右工門

# 津島の旧家に残る服部擔風の書

津島市内の旧家に残る『服部擔風』の七言絶句の「紙本」と「色紙」「服轍」の篆刻

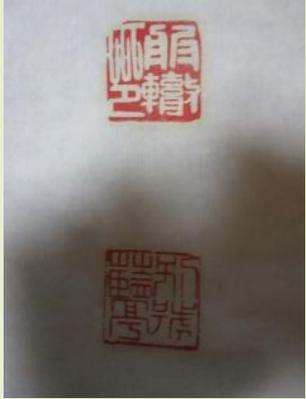
和歌野客言波津  
樽吐客飯著梅像  
地主人情所及  
夕陽大丁紅梅  
擔風

和歌野客言波津  
樽吐客飯著梅像  
地主人情所及  
夕陽大丁紅梅  
擔風

扇城花月記  
細石伴歸山梅  
和歌野客言波津  
樽吐客飯著梅像  
地主人情所及  
夕陽大丁紅梅  
擔風

和歌野客言波津  
樽吐客飯著梅像  
地主人情所及  
夕陽大丁紅梅  
擔風

和歌野客言波津  
樽吐客飯著梅像  
地主人情所及  
夕陽大丁紅梅  
擔風



和歌野客言波津  
樽吐客飯著梅像  
地主人情所及  
夕陽大丁紅梅  
擔風



和歌野客言波津  
樽吐客飯著梅像  
地主人情所及  
夕陽大丁紅梅  
擔風

## 『蘇江の漢詩人・服部擔風』のプレゼンのまとめ

- 明治・大正・昭和の三代にわたって日本の漢詩壇に多大な功績を残した（1867～1964）
- 96年の生涯を故郷弥富で過ごし、地域の人々に親しまれてきた。
- 地元には佩蘭（はいらん）吟社、清心吟社などの漢詩の結社を起こし、自ら漢詩文の講義や添削指導を精力的に行った。
- 書家としても知られ、弥富市近隣の多くの家庭にその書が残されている。
- 擔風の漢詩は森春濤（しゅんとう）・槐南（かいなん）の影響を受け、情韻ともにすぐれ、詩風は春濤に最も近いと賞賛されている。
- 昭和22（1947）年に刊行した『擔風詩集』（全7巻）で日本芸術院賞を受賞し、漢詩人として全国的に知られた。生涯指導した結社は全国40社以上に及ぶなど、わが国の漢詩の発展に大きな役割を果たした。

『故郷を愛した漢詩人・服部擔風』伊藤隆彦 kisso 2015夏

- ◎教育界にも大きな影響を与え、教師の教養講座（研修）の講師を務めた。
- ◎加藤唐九郎、多気槩山、伊藤才兵衛などの陶芸家、日本画家、郁達夫など作家など幅広い文化人との人脈をもっていた。